

でやっと今日まで生き永らえてこられたのだ」それから二、三日経って生命の灯が消え去らんとするのを感じた陽明は、使者を出して周積を舟中に招き寄せた。彼は悲愴な気持ちで駆けつけて陽明の枕辺に立ち、頬がげっそりとそげ落ちた師の顔をじっと見つめた。その気配で陽明は静かに眼を開き、頭を周積の方に向けた。「さらばじゃ」(P15—16)

○錢明主編『陽明学新探』

二〇〇二年四月、中国美术学院出版社刊。B6版、332頁。

浙江省社会科学院國際陽明学研究センターの編集(主編者は錢明)王陽明逝世四七〇周年紀念國際陽明学研討会の論文集。

浙江省社会科学院國際陽明学研究センター、紹興市社会科学院等の主催による國際学会。一九九九年三月二十九日—四月三日、挙行。

- (1)王陽明の墓祭。(2)陽明洞天の奠基儀式。(3)學術研究発表。(4)陽明關係の遺跡參觀。

本書は、会議において発表された論文、また会議の記念に寄せられた論文や賀詞等四十篇を収めたものである。

内容は、陽明学の歴史的意義から現代的価値にいたるもの。王陽明思想の特質。陽明学の淵源・形成・發展等。陽明学と道教・仏教の關係。王陽明の学統や子孫。陽明關係の佚書。陽明学の日本・韓国をはじめとする外国への伝播等多岐にわたる論文集である。

本学会については、浙江省社会科学院の元院長の王鳳賢先生が

「紀念陽明先生弘揚王学精華」(『孔子研究』一九九九年第三期)と題して發表しており、また本書の編者の錢明氏が「紀念王陽明逝世四七〇周年國際學術討論會綜述」(『浙江學刊』一九九九年第五期)として發表している。

本書所収の論文のうち半数は提要であり、論文も發表原稿そのものと、發表されたものでなく寄稿されたものがある。その中に、故楠本正繼教授の『宋明時代の儒学思想の研究』から、陽明学關係の部分の訳を、「陽明後学簡論」(徐儒宗訳)として収められていて、中国の研究者の求めに供している。また本論文集のために寄稿された論文に陳永革の「心学流变与晚明仏学復興的思想特質」、方祖猷「王畿論良知与道教養生術」、吳震「歐陽南野論」等があるが、特筆すべきものとして、王陽明第十六世孫である王詩棠氏の「王陽明世系及遺存在紹興」がある。また王陽明の関連資料として、佚文の研究に永富青地「関于王守仁佚文研究」、編者錢明氏の『王陽明全集』未刊詩詞及び佚文の彙編の考釈が収められている。

○錢明著『陽明学的形成与發展』

二〇〇二年九月、江蘇古籍出版社刊。B6版、337頁。

本書の構成を目次によって示すと次の通りである。

上編 陽明学的形成

第一章 王陽明的世家及後裔

第二章 王陽明早期思想性格的形成

第三章 王陽明中後期思想的變遷

第四章 王陽明与湛甘泉思想的異同

中編 陽明学的分化

第一章 分源別派

第二章 分化変異的思想基礎

第三章 各流派的主旨与糾葛

下編 陽明学の展開

第一章 二王思想的異同及其特質

第二章 羅念庵思想的演變及其对陽明学的修正

第三章 陽明学派主意的形成与終結

付録 『王陽明全集』未刊散佚詩文彙編及考釈。これは前述の

『陽明学新探』に収められているものの再録。

目次を眺めただけでも分かるように、王陽明と彼の思想形成がいかになされたか、そして其の思想がどのような特徴をもつて後学に受け継がれたかが述べられている。

これまでの、大陸における研究の中には、文革の残滓を何らかの形で残したものが多かったが、本書は、全くそれらを脱却した、純粹に哲学的、思想的に究明されているものであり、最近の陽明学研究の中では特筆に価するものである。著者錢明氏自身も述べるように、陽明学の展開については、王龍溪、王心齋そして羅念庵をとり上げるのみで、また主意説を極める面で、王一庵、劉念台をあげて論じてはいるものの、未だ不十分なものがあり、其の点について、陽明後学及び晚明思想史の研究は短時日で成されるようなものではないので、これが氏の現在の成果であり、当然のことながら錢明氏も今後の課題としている。

著者錢明氏は、本誌に度々登場しているので、日本の陽明学研究者にとつては、馴染みの研究者である。氏の研究の特色は、日本に留学し、日本語に堪能であることから、日本における陽明学研究を十分に精通した上に、自国において博搜した文献資料の成果をふまえている点に大いに参考にすべきものがある。

○潘富恩・徐洪興主編『中国理学』（四）

本巻主編 呉震 本巻編著 呉震・徐洪興・趙剛

二〇〇二年六月、東方出版中心刊。B 6 版、323 頁。

本書は、宋代、明代の理学に関するキーワード集である。

第1部は、概念・述語・テーマに関する項目の解説。

新儒学、道学、理学、道統、理、太極、理一分殊、性即理、心即理、良知、知行合一、万物一体、赤子之心、格物窮理、童心等 一四七項目。

第2部は、事件・典故に関する三二項目。

鵝湖之会、朱陸同異、天泉証道、滿街之人都是聖人等。

第3部は、十五の書院についての解説。

白鹿洞書院、考亭書院、姚江書院、東林書院等。

それぞれの部門の最初に概述がある。最後に索引があり、辞書的に利用すると便利。

本書は、もともと徐洪興教授が全てを担当する予定であったが、公務多忙のため、徐教授が起草し、呉教授が補充修訂し、特に宋代及び大条目を徐教授が、明代及び兩宋の個別の条目を呉教授が、そして趙教授が陽明心学関係と事件典故の若干を執筆している。

（以上正田）